

本物の貌

黒っぽい猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

春から大学生になった青年、月城 白（つきしろ びやく）。彼が目を付けられたのは分厚い仮面に本性を隠し込んだ女、雪ノ下陽乃だった――

家を忌み嫌う青年とその周りの人々が描き出す物語…開演

目次

甘くない時間	1
逃げられない現実	9
車内にて	15
顔合わせ、最初の事件	19
幕間くそれは次の事件への導入く	25

甘くない時間

部屋の中にはページをめくる音だけが響くのが、僕の休日だった。人付き合いを面倒だと感じる僕には、この場所に知り合いは一人もない。

その為にわざわざ実家から遠く離れたここ、千葉大学を選んだのだ。

この場所で静かに、自分が望んだわけでもない理系の学部で退屈な日々を独りで過ごす。そうして僕の青春は終わりだ。少なくとも僕自身はそれでよかった。それなのに――

「どうしてアンタは僕の家に上がり込んで本棚を漁っているんです？ 雪ノ下さん」

目の前でマンガを読む女に、僕のそんな日常は崩されてしまった。「まあまあ、そんなことを言いながらお茶を用意してくれるくらいは歓迎してるくせに〜」

まただ。その人懐っこい笑顔が向けられると肌が氷で撫でられた時のような寒気を感じる。有り体にいえば、本能的な恐怖だ。蛇に睨まれた蛙はきつとこんな内心なのだろう。

「……………なら、早くそれを飲んで帰れ。僕の読書の邪魔です」

その笑みの奥に見え隠れするゾツとするほど暗く深い何か。それが彼女が持つ得体の知れなさを深くする。

ああ、何故……………と今更ながら後悔する。よりもよってあの日、どうして僕はこの女の隣に座ってしまったのだろう。あの日から僕の日常は非日常へと変わってしまった。

話は約半月前に遡る。前期授業の正念場である七月の半ば。

寝坊し、遅れて教室に入った僕は辟易していた。後ろから全体を見渡してみるとほとんどの座席は人か荷物があられ座れそうにないのだ。

だからといって荷物を無理矢理どかして座るほどの度胸は残念ながら持ち合わせていない。

教授は気にしないだろうし立ちながら受けるか、と半ば覚悟を決めていたところ近くの女子生徒から声をかけられたのだった。

「席が空いてないなら隣くる？」

ここまでいえば理解してもらえるだろうが、その相手が他の誰でもない雪ノ下陽乃だった。僕より一つ上、学年的には二年生にあたる彼女はちよつとした有名人だ。才色兼備の文武両道だそうだ。

一応名前は知っていたし、人当たりがいいという評判も風の噂に聞いていたので僕は有難く座らせてもらうことにした。座席が空いていなくて若干焦っていたこともあり、この時点では彼女の本質には気づいていなかった。

僕が彼女に形容しがたい気持ち悪さを感じるようになったのは二度目の邂逅よりあとの事だ（とは言っても席を譲られた日の昼休みの事だったのだが）。日陰のベンチで横になつて本を読んでいると不意に影が濃くなった。

「うわー、随分年季の入った本を読んでいるのね、何を読んでいるの？」

「……太宰、斜陽」

顔も見ず適当に応える。読書の邪魔だ、と言わんばかりに雑な態度だが実際に邪魔なのを暗に示している。が、通じていないのか意に介する様子は微塵も感じられない。

「へえ、理系なのに面白いわね。いつも本を読んでいるようだけど」「文系理系なんてのは偉いやつが決めた大雑把な括りでしかない。そこに乗っているのは乗るしか社会に適應する術がないからだ。本が好きな理系もいれば数学を嗜む文系がいてもいいだろう」

これは僕の持論で、実体験に基づく体験談でもある。が、声の主はさして興味もなさそうだ。

「ふーん……それはそう……と！」

腹の立つ相づちを打ったかと思えば、突然上から本が奪われ今まで見ないように入っていた顔が目に入る。それと同時にふわりと甘ったるい匂いが鼻を刺激し顔を顰める。

「話をする時は人の目を見なさい？」

そう言つて笑みを浮かべた彼女と目が合った数刹那の間に戦慄を覚えた。彼女の仮面に気がついてしまったから。とても精巧に作られておきながらも作り物。彼女はそんな目を持っていた。

無意識のうちに迂闊にも僕は零していた。その言葉が決定的に彼

女へと響く言葉になってしまうことを気づかないうちに。

「アンタ——醜いですね」

「っ!!!」

時が、止まった。もちろん本当に時が止まるようなことは有り得ないのでこれは僕の錯覚なのだろうが。少なくとも目の前の女は動きを止めた。

そして、突然ニヤツと口を三日月に歪めた。

「見えるんだ、キミ。私が」

その目には爛々とした光が点っていた。その異様さに——そして美しさにゾツとしながらも目をそらすことは出来なかった。

「ううん、なんでもないわ。また話しましょ。月城 白君」

二度目の邂逅は彼女のそんな言葉と共に幕引きとなった。そんな言葉と甘ったるい、胸がムカつくような匂いを残して。

それ以来、彼女は何かと理由を付けてはこちらに絡んでくるようになった。そして僕の住所をいつの間に関きつけたのか、つい二時間ほど前に家まで直接尋ねてきたわけだ。

「……どこで僕の住所を知ったんです？ 同級生には教えてないはずなんですけど」

今更ながら聞いてみると、悪びれる様子もなく答えた。

「うーん、チョットね」

それでは答えになっていないとボヤきたかったが、恐らく聞く耳は

持たないので諦めた。

「……まあいいです。どうせ何を言っても無駄なんでしょうし」

「その言われ方は少し腹が立つなく」

ズイ、と身を乗り出すと頬をグリグリと指でつついてくる。意外と痛い。

「やめてください。痛いです」

其れを適当にあしらってから自分のカップに手を向けて空であることに気がついた。ちらりと見ると雪ノ下さんのそれにも何も入っていない。

「……はあ。何を飲みますか？」

「あら、早く帰って欲しいんじゃないの？あ、コーヒーお願い」

「手土産の一つも渡されて早々に追い出しちゃ家にしばかれます。仕方がないでしょう」

実際に僕の家冷蔵庫には大きめのケーキがワンホール入っていた。この人が手土産にと持ってきたものだ。受けた恩はその場で返せという家訓の我が家は大嫌いだ、それでも身体に染み付いた思考はそう簡単には変わらない。今だってそうじゃなければこの人もっと早く追い出していた。

「さつきは追い出そうとしてたのに？」

「あれは僕の本心のボヤキです。独り言ですよ」

それにどうせ貴女は何を言っても帰らないだろ、と心の中で付け加える。

「大変なのね、いい所の御曹司も」

意味ありげに向けられた視線に肩を竦めながら彼女を睨みつける。

「それを言ったら貴女もでしょう、お嬢さん」

「月城建設株式会社の社長の孫でしょう、君は？」

「……だからなんです？そういう貴女は県議会議員と建設会社社長のご令嬢でしょう。こんな所で油を売っていいのですか？」

「私はいいのよ。それより君は、地元のコネを作らずにこんな場所に出てきてキャンパスライフを満喫していいの？」

無駄な言葉の投げ合いだったが、彼女のその一言でこの不毛な話に

終止符を打てそうだ。

「それが嫌だから逃げてきたんですよ。僕は——アイツらのような金の亡者に…金に操られるだけのモンスターになりたくないんです」

その傀儡となることを良しとした貴女とは違って。今度はその言外を拾ってくれたらしい。睨みつけるようにこちらを見つめる雪ノ下さん。その目に虚ろはなく、どうやら本心からのものだど理解する。何を思っ、どんな感情を思っ僕を睨んでいるのかまではわからないけれども少なくとも今の彼女のそれは薄気味悪い^{表情}仮面ではなかった。

が、それも数秒のことで直ぐに彼女の表情は能面のように再び象られてしまった。

「ふーん……私とは違う、って言いたいよね？」

ただ、何故だか彼女から不穏な雰囲気を感じる。身の毛のよだつというのはいかような感覚なのか、と戦々恐々していると何かに背中から抱き着かれる。

この部屋の中に僕と雪ノ下さんしか居ないことを鑑みればそのなにかは明白で、だが僕にはそれを喜んだり、柔らかな感触を楽しむ余裕は全く無かった。

それは殺気と呼んでも差し支えないほど強く恐ろしい気配だった。

「っ——」

こちらの首筋をその細い指でなぞりながら耳元で囁かれる。

「ふふ。そんなに怖がらなくてもいいのよ？ 貴方の言ってることは確かに正鵠を射ていない訳でもないのだから。

——でもね、白君：私は決して親の傀儡ではないわ」

二度と間違えないように。そう言っ雪ノ下さんは僕から離れた。その場に崩れ落ちるのを堪え、何事も無かったかのように珈琲を入れる僕だが、指の震えは止まってくれなかった。震える指で四苦八苦しながら半ば麻痺した頭を回す。

（こっわ……殺されるかと思っ……なるほど。この話は地雷だったか）

あわよくば不快に思っ帰ってくれるのではないかと淡い期待を

抱きながらこの話題を振ったのだが、どうやら逆効果どころか虎の尾を踏んでしまったらしい。

「君のさっきの発言の意図は大体分かってるわよー？ 私が君を不快に思っただけ早く帰ることを期待したのよね？」

しかも見抜かれていた。にこにここと笑っているが、こころなしか彼女の目の奥はまだ怒っているようにも見える。

「ふふっ、でも残念でした。君みたいなタイプは今まで私の周りにはいなかったから寧ろ逆効果よ」

「僕みたいなタイプ——貴女に嫌われようとするタイプのことですか？」

「ええ。私に媚びを売ってくる人は多かったけれども、君のように私に嫌われるために動くなんて面白いじゃないの」

「どうやら、斜め上に行く方向で好かれてしまったらしい。尤も、ただの玩具方面の扱いらしいが。」

「でもまあ、さっきの発言で私の乙女心が傷ついたのは確かだし？ 明日辺りに買い物に付き合ってもらっちゃおうかしら？」

「露骨に僕の予定を勝手に埋めなくてくださいよ。困るでしょうが」
「だって予定なんてないでしょ？」

「明日から暫くはボランティアに参加するので家を空けます。残念ながら雪ノ下さんのご期待には添えませんよ」

「むむっ…デートを断られたのも初めてかしらね？」
「知りませんよそんなの。アンタのデート事情なんか僕の知るところじゃない」

「こちらの意見などはなから考えてなどいない彼女の振る舞いにはだいぶ辟易とする。」

「それじゃ、空いてる日に適当に連絡入れるから君の連絡先ちようだい」

「疑問形じゃなくて命令形な辺りに理不尽さしか感じられないのですが」

「というか、なぜ僕なのか。」

「だからさっきから言ってるじゃないの。好奇心よ。初めて私に嫌わ

れようとした人の生態を私も観察したいの」

「別に僕はアンタの実験動物じゃないんですけどね——はい、これが僕の電話番号です。LINEの方が良かったですか？」

「両方とも貰っとくわ。君が逃げられないように」

「どうやら墓穴を掘ってしまつたらしい。触れなければ機種変をすれば済んだ話だったのに。」

「逃げるもなにも同じキャンパスなんだから逃げようがないんですが……」

「のらりくらりと二週間くらい私の搜索網の死角について私を避ける人に言われても説得力が皆無よ。ま、これでそんな風に逃がすことも無さそうだけど」

その後、彼女は僕の淹れたコーヒーを飲み帰っていった。見送った後、肩の力を抜いてそのままベッドに顔を預けた。

——厄介な人に目をつけられたものである。

だが、千葉に出てきて三ヶ月。その中で一番心が自然体でいられた日が今日なのもまた確かだった。

あの人に負けず劣らず仮面を強く持っている僕だが、あの人となら素で会話できるような、そんな気がした。

「——運命なんて、バカバカしい」

そんなモノはありえない。それはただの勘違いでしかないのだから。過去の過ちから僕はそう学んだのだ。

そんなことをぼんやりと考えていたら、いつの間にか夜の八時を過ぎていたのだった。

逃げられない現実

『突然の連絡失礼します。来週の水曜日から、小学生の林間学校に臨時ボランティアとして参加できませんか？』

そんなメールが連休の直前に届いたら、どう対応するのだろうか。大抵の場合は断るに違いない。僕でも普通の友人からの遊びのメールなら一瞬で蹴っていた。

『了解しました。何時に何処へ行けば良いですか？』

だが、それがとても親しい人からの頼みなら話は変わってくる。僕は即断してボランティアへの参加を決めていた。

雪ノ下陽乃の襲撃事件の翌朝、支度を終えた僕は千葉駅前のロータリーで人を待っていた。真夏なだけあって流石に暑い。

日陰で紙パックのミルクティーを飲みながら扇子で涼をとっていると目の前にマイクロバスが止まった。だが、中から出てきた女性に声をかけられるまでその人が今回の待ち人だとは思わなかった。

「久しぶりだな、白。先生達はお元気かな？」

スラリとした高い背丈に長く黒い髪を靡かせて1人の女性がマイクロバス降りてきた。ニヒルな笑みを浮かべながらタバコをくわえる姿はなんとも男らしい。本人に言ったら怒られるから言わないけど。

「…………お久しぶりです、静姉。父と母は相変わらず元気ですよ。三ヶ月ほど顔を見ていないので本当にどうなのかまではわかりませんがね」

その言葉に笑みを苦笑に変えながらこちらの頭をポンポンと優しく撫でてくる。小さい頃からずっとさされているので心地いい。

「生徒の前でその呼び方はやめてくれよ。威厳が無くなる」

「わかっています。ボランティア中はちゃんと呼びわけますよ、静姉」

平塚 静。僕の父親の教え子であり今はどこかの進学校で教師を

しているそうだ。今回僕が呼ばれたのはその高校の生徒が行うボランティアのサポートの為。三日ほど前に急にメッセージで頼まれたが、僕は二つ返事で引き受けた。

この人の思い付きが急なのはいつもの事だし、それに今回は逃げるのにお誂え向きだ。

「まさか本当に引き受けて貰えるとは思っていなかったが、友人付き合いは大丈夫なのか？」

依頼してきた本人が言うのか、と言いたい気もするが問題ないので素直にそう答えておく。

「たかだか数日くらい音信不通になっても別に問題ないですよ。彼らとの関係はその程度のもんです」

「相変わらずだな、白は」

それは褒めているのか、くつくつと喉奥で笑いながら静姉はこちらを見ている。煙が気管に入らないのだろうか？

「まあそれに、逃げる口実にもなりますからね」

あの女の顔を思い出すだけで鳥肌が立つ。本当にああいうタイプの人間は苦手なのだ。どうやらボソリと零したそんな言葉を、静姉は聞き逃さなかつたらしい。

「逃げる？誰かに追われているのか？」

「静さん——静先生は知っていますか？雪ノ下の所のご令嬢ですよ」

「ん？雪ノ下の——という事は陽乃か。確かお前とは同じ大学の……ああ、そういう事か」

僕の言わんとしている人物と合致したらしい。一瞬意味ありげに目線をバスのドアの方に向けてから完全に同情の目でこちらを見る。くる。

「その——頑張れよ、白」

「頑張りたいくないです、やめてください本当に。何で嫌われるように振舞ってるのに近寄ってくるんですかあの人」

「あら？それは勿論貴方が面白いからよ？」

「だから、それが迷惑なんですよ。大体あの女。いつも周りに男たくさん侍らせてるじゃないですか。人たらしなのはいいけどこちらに

近寄らないでほしいです。半径5メートル以内に入らないでもらいたい」

「ふーん、そんなに嫌いなんだ〜」

「あんな猫を何重にも被った上に虎の毛皮で作った服を着て出歩いているような女を好きになれるわ、け……」

愚痴を零していると間に聞きなれた声が聞こえてくる。あれ？と思いい目線をそちらに動かすと満面の笑みを浮かべる悪口雪ノ下陽乃の対象の姿があった。

もちろん笑みを浮かべているからと言って本当に彼女が愉快的な気持ちであるとは限らない。今だって僕の背中からは滝のような冷や汗が流れているのだから。これはマズい、非常にマズい。

「ちよつと僕お手洗に行つてきま「先に少しお話しましよ？いいわよね、白クン??」——ハイ」

逃げようとした手段も会えなくご破算。どうしようもなくなった僕は首根っこを掴まれて連行されていくのだった。静さんはいつの間にかバスの中に戻つて扉を閉めていた。

見捨てられたのか……………

「それで、僕をここまで連行してなんの用ですか？」

駅のロータリー近くのファストフードに連れ込まれた。互いにコーヒーを注文して適当な席に腰かける。

「べーつに？何にもないわよ。ただ面白そうだったからね」

にこにこ余所行きの笑みを貼り付ける雪ノ下陽乃。コーヒーを飲む姿も様になっていく辺り、やはり容姿のレベルはとてつもなく高い。自分の魅力を引き出す術を熟知しているのだろう。

「あら、そんなにじつと見つめて、もしかして惚れちゃった？」

「なに馬鹿な事言ってますか」

「つれないわねえ」

わざとらしくポーズをとる雪ノ下さんにため息をつき睨みつける。が、やはり彼女は動じない。

「そんなに私が嫌い？」

「そうですね。僕は貴女が、できれば金輪際関わらないでほしい程度には嫌いです」

そうハッキリと言ったはずなのに雪ノ下さんはニヤリ、とまたあの笑顔をうかべた。

「ふふっ、そうこなくっちゃね」

今度はその笑みを浮かべる彼女の目を直視出来た。それは例えるなら『獲物を見つけた猛獣の目』だろうか。実際に猛獣は見た事がないわけだが、いたらこんな風なのではなからうか。

「なんでそんなに嬉しそうなんですか………本当に僕は戻りますよ」

この人といってもこちらの心労が募るだけだ。さっさと切り上げるに限る。

「あ、最後に一つだけ。今回のボランティアに私の妹が参加しているんだけど、素直になれないだけのいい子だから宜しくね、白クン」

ニコツと笑いながら手をヒラヒラさせる雪ノ下さんを背後に、こん

なにも厄介な人の妹がいるのか………と若干頭を抑えながらその場を後にするのだった。

「……どうも、雪ノ下雪乃です」

雪ノ下陽乃の妹だからと身構えてはいたものの、そこまでの危険人物ではなかった。いや、寧ろ雪ノ下陽乃とは真逆の性格をしているようだ。

「初めまして、雪ノ下さん。月城 白です。よろしくね」

スつと手を出すと微妙な顔をされたのでおずおずとその手を下ろす。愉快そうな静姉が笑みを浮かべているのに若干イラツとした。

「はいはい！比企谷小町です！よろしくです、白さん！」

と、隣から元気一杯の言葉が割り込んできた。

「あ、ああよろしく」

ずずいっ、という効果音がよく似合う活発な女子だ。満面の笑みを浮かべている少女——比企谷さんが差し出してきた手を握る。

「それにしても、白さん中々にイケメンですなー。彼女さんとかいらつしやるんですか？」

「いきなり突っ込んでくるね、比企谷さん。残念ながら僕に恋人はいないよ。彼女いない歴〓年齢さ」

「えー、モテそうなんだけどなー。あ、それと小町の事は小町って呼んでもらっていいですよ！兄と被りますからー！」

「兄？」

「はい………ってお兄ちゃん、なんで木の影に隠れてるの？小町の的にポイント低いんですけどー」

比企谷さん、もとい小町さんがキョロキョロと辺りを見渡して一点でピタリと止まる。その方向に目を向けると所在なさげにひっそりと立つ一人の男が立っていた。

無意識のうちにこちらを警戒させる彼の目つきと雰囲気若干シンパシーを感じる。小町さんはベタベタなお世辞を言ってきたけど僕は残念ながら容姿が優れている訳では無い。髪も無造作だし片目も隠れている。そして何より目つきが悪い。

「……………」

「……………」はじめまして、月城 白です。大学一年。好きなように呼んでください」

「……………」比企谷八幡、高校二年です、よろしくお願いします」

互いに最低限の会話だけ済ませ僕はバスの方へと戻る。一番快適であろう座席——静姉の助手席を確保する為だ。

「ふう……………」静さん。僕は少し仮眠を取りますので、そのあとで今回のボランティアについて詳しい話をお願いします。きっかり一時間で起きますので」

「ふつ……………」一時間と言わず到着まで寝ていても構わないぞ？ どうせ寝ていないのだろうか？ 目元のクマが酷いぞ」

「別に問題ありませんよ。それではおやすみなさい」

堅物なのも相変わらずだな、と肩を竦める静さんを視界の端に入れつつも僕は安眠用の音楽とアラームをセットしイヤフォンとアイマスクを装着するのだった。

車内にて

耳朶を震わす音に目を覚ました。

「ここは——」

「本当に一時間で起きたのか、白。もう少し寝ていてもいいぞ?」
そうだった。ここは静姉が運転する車か。

「寝てるわけにもいきませんよ……あつた」

カバンを漁り取り出したのは缶コーヒード。眠い時には微糖を飲みカフェインと糖分を同時に体に行き渡らせる。

「よしっ……覚醒しました、静さん。今回のボランティアについての話をお聞きしても宜しいですか?」

「ああ。小学生の林間学校、という事までは説明したかな?」

「はい。高校生だけでも十分人手は足りてると思います。がなぜ僕が呼ばれたのか、それが理解できません」

「ふむ。その理由は大きく分けて二つだ。一つは君のご両親から君の事を頼まれているからだ、上京してるから頼むってね」

全くあの人達は……過保護がすぎるだろう。

「そしてもう一つは、彼らの人間関係だ。決して良好とは言えない二組がかち合ってしまった。無所属の君に外から少し助けてもらおうと思ったのさ。私の紹介なら誰も文句は言わんしな」

「……なるほど、大体わかりました。雪ノ下雪乃さん達と葉山隼人君達ですね。んで、由比ヶ浜さんは丁度その中間あたりですか」

後ろをちらりと見れば席順と環境がほぼそのままグループの違いを表している。雪ノ下さんと比企谷君は基本的に本を読んでおり、小町さんや戸塚君に話を振られた時に話す程度。

葉山君を筆頭にしたグループはそちらはそちらでおしゃべりに興じている様子が見られる。時々チラリと互いのグループの方は見るがそれを超えての会話はほとんど無い。

唯一例外として由比ヶ浜さんだけが両グループを行き来するよう動いているのがなんだか可哀想に見えた。

一応だが、僕は既に今回のボランティア全員と自己紹介を済ませて

いる。その所感としては、葉山君は別に悪い人では無い、そして比企谷君は別にいい人ではない、といった感じだった。

「ほう、その心は？」

「いえ、どちらも人間なんだなという事です。葉山君は勉強も運動もできるタイプですがどこぞの誰かと比べると人間らしい感性——感情を持っている。それは周りに関心がある証でしょう。」

比企谷君は何処か達観しているようでいてそれだけでは無い。その中には確かに彼なりの優しさが混じっている、周りが気づかないだけでね。でもその優しさは彼の傷つきたくないといういわば自分の脆さの裏返し。そういう意味ではやはりいい人である、とは言い難い」

誤解して欲しくないのだが、僕は比企谷君を高く評価している。彼の人を見る目は曲解しながらも本物だし葉山君のように体裁を取り繕おうとしない分信用もしやすい。

なにより、彼と僕は少し似ている。あの目は知っている目だ。手痛い裏切りとそれが生み出す胸の痛みと悲しみを。

「ふっ、中々いい評価を下すじゃないか白。やはりお前を連れてきて正解だった」

「やめてください、まだ始まってすらいんですよ？家に帰るまでが遠足なんですから」

「はははっ、その歳になってもまだそんなことを言うなんて、思考回路のわりに案外ピュアなんだな、お前は」

本当に面白そうに笑う静姉に溜息をつきながらシートにからだを預け脱力する。再び眠気に襲われはするものの今度は寝ることはない。

鞆から文庫本を取りだし文章の世界に身を浸す。この時が僕にとつては一番至高の時だ。

イヤフォンから流れてくる静かな音楽に集中していたら、ふと車が止まった。目的地に着いたのだろうか。

「サービスエリアだ。少し休憩にするから君達は昼食を買ってきたまえ。一応ある程度は経費で落とせるから領収書は持ち帰ってくるよ

うに。出発は三十分後だ」

『はい』

その言葉に僕と静姉を除く全員が去っていった。

「ん？お前は行かないのか、白？」

「ええ。弁当作ってきましたから。静姉の分もありますよ」

「おお、そいつはありがたい。お前の料理は絶品だからな」

子供のようにキラキラと目を輝かせているのがバレバレの静姉に苦笑しながらカバンから取り出した箱のうち二つとおにぎりを三つほど手渡す。

「箸は割り箸で。そこに有りますから」

「うむ、いただきます」

「はい。召し上がれ」

静姉が食べ始めてから僕も箸を手にとっておかずを少しずつ口に運んでいく。うん、今日もいつも通りの味だ。特にこれと言って美味いとも思わない。静姉も美味しそうに食べているが——ん？箸が止まったな。口に合わなかったかな？

「いや、この料理は酒に合いそうだなと思っただけ……また機会があったら作ってくれないか？」

「ええ、構いませんよ。ではその時はお金を貰いましょうかね」

「はははっ、言うようになったじゃないか白。だいぶ神経が太くなつたみたいだな？」

「うん……色々、あったからさ」

「……そうか」

くしゃりと頭を撫でられながらぼんやりと弁当を見つめる。思い出すのは中学、そして高校生の頃の事だ。

気持ちを含めたものなど、所詮価値はない。意味があるのは金銭のかかる物だけであると、僕にそんな紛い物の正しさを押し付けたあの出来事。

『あんだなんて、金しか取り柄がない癖に！』

甦ってきた苦い記憶を脳の奥にしまい込みながら、絞り出すように呟く。勿論、顔に笑顔を貼り付けるのも忘れない。

「——冗談です、いつでもとは言いませんが時々なら作りに行きますよ、静姉」

「ん、楽しみにしているよ」

静姉は何も言わなかったけど、その目は僕のことを全て見通しているかのような目だった。勿論そんな筈はない。静姉が僕の両親から何かを聞いていれば話は別だが、何かあった事は見抜いているのだろう。何も言わず薄く笑って僕の頭から手をどかした。

「さて、私にも準備するものがある。手伝って欲しいので早めに食べてしまいたいが無構わないか？」

「はい」

その後は互いにポツリポツリと言葉を交わしながら残りの時間を過ごした。林間学校は始まってすらいなというのにセンチメンタルな気分になってしまったことに内心苦笑いしながら昼食を食べたのは言うまでもないことだろう。

そして買い物に行ったみんなが戻り、バスが再び出発してから林間学校の目的地に着くまでの間、僕は皆にも配布した葉に目を通すことにしたのだが、それで若干酔ってしまったのはまた別の話である。

顔合わせ、最初の事件

「うーん……やっとな到着か……」

昼過ぎに、僕達は今回の林間学校が行われる千葉村に到着した。外の空気を吸って気分の切り替えを行う。

「大分辛そうでしたけど大丈夫ですか？」

小町さんが水のペットボトルを渡してくれたのでありがたく頂く。

水筒の中身はコーヒーなので正直助かった。

「うん、まさかバス酔いするなんて思わなかったけどね……」

「帰りは兄と座席を代わってもらおうといいですよ、白さん。バスの中
中央は酔いにくいって聞きますし」

「小町、そこは普通にお前が席を変わればいいんじゃないの？なんで俺を巻き込もうとするの？」

「だって……みいちや……お兄ちゃんはある席にいても何も話さないでしょ？それに私が白さんとお話してみたいし！」

「小町ちゃん、今ごみいちちゃんって言いかけたよね？八幡的にポイント低いんだが？」

「お兄ちゃん、キモイ」

「……」

ボコボコに言われて八幡君からとんでもない絶望のオーラが溢れだしている。今なら死の支配者になれそうだ。

「ほら、茶番をやっている暇はないぞ！早く小学生達と顔合わせだ！」
パタパタと忙しなく動き回る静姉の後に僕達はついていくのだった。

小学生達と合流した後、小町さんを含めた高校生組が小学生に対して自己紹介をしている間に静姉と僕は小学教諭達と自己紹介——という名の軽いミーティングを行っていた。

一日目のフィールドワーク、そしてカレー作りの際の所属班についてざっくりと確認を行い各自が自分だけでなく他人の役回りまで理解しておく事などを決めた。

そして一通り確認が終わった所で葉山君がこちらを呼びに来た。

「月城さん、平塚先生。小学生に自己紹介をお願いします。俺達もう済ませたので」

「了解した。白、お前からしてこい」

「わかりました、静さん」

タバコを取り出しながらニヤリとした静姉にため息を漏らしつつ小学生の輪の方に向かう。さっきまで忙しなく動いていたのだから休憩が必要だろうしね。小学生の近くまで歩いていくと、興味津々といった様子でこちらを見上げる無数の目に貫かれ若干顔が引き攣ってしまった。

正直に言えば、子供の相手は得意ではない。彼らの目は、言葉は、抱いているものは良くも悪くも素直だ。だが、今更逃げる訳にもいくまい。

一瞬目を閉じ、息を深く吸い込む。

そしてとびっきりの笑顔作り笑顔で小学生達の方を見る。

「……今回、特別参加のボランティアとしてここに居ます、月城白です、気軽に話しかけに来てください、短い間ですがよろしく」

できるだけ短く、必要最低限の言葉を残しその場を後にする。まばらな拍手を背に受けながら引っ込むと静姉が歩いてくるのが見えた。すれ違いざまにフワリと煙草の匂い。本当に一服してきたらしい。

「悪いな、白」

「……そう思うなら先に自己紹介して下さいよ、困ります」

「はははっ、すまんすまん。まあ私も自己紹介をしてくるから我が校の生徒達と親交を深めていてくれ」

手をヒラヒラさせながら反省する様子もなく行ってしまった静姉

にため息をつく。あの人は本当に……。

日陰でコーヒーを飲みながらぼーつとしていると唐突に声をかけられた。

「随分と平塚先生と仲良さげですね、月城さん」

「ああ、一応僕の両親の教え子みたいだからね。僕の小さい頃の話も結構知ってる人だよ」

少し驚いたことに、話しかけてきたのは雪ノ下雪乃さんだった。出発前の態度からしても、僕に彼女から接触してくることなど無いと思っていたので虚をつかれたのだが雪ノ下さんにはコチラの内面は悟られていないようだ。

「……何か私の顔についていますか、月城さん？」

「いや、君はてつきり人見知りだと思っていたからね。僕に話しかけてくるのは少し意外だった」

「……そうですか、ご期待に添えず申し訳ありません」

皮肉っぽくわざわざそんなことを言うてくる辺りはやはり姉とは似ていない。良くも悪くもあの人からは人間らしさが微塵も感じられないことと比べると雪ノ下雪乃の方が人としては好感が持てた。

「別に期待に沿う必要は無いだろう。むしろ僕は安心した。君が君の姉のように取り繕う人間じゃなくて良かった。僕にとつては人間味のある君の方が接していて気が楽だよ」

「……！姉をご存知なのですか？」

「同大学、同キャンパスともなれば多少はね。あの人には前期に見事に恩を押し売りされてしまった仲だよ」

「……なるほど、ご愁傷様です。姉がご迷惑をおかけしております」

「ああ、全くだよ。いつも振り回されっぱなしだ」

「ふふふ……」

下らない軽口で互いに笑う。共通の話題があつて助かった。と、いきなり雪ノ下さんの後ろに影が迫ってきたかと思つたらそのまま彼女の背中にダイブした。

「ゆきのんゆきのん！何で白さんともう仲良さげなの?!ゆきのんは人見知りだから一番仲良くなれなさそうだと思つてたのにー！」

「……由比ヶ浜さん、私は別に人見知りな訳ではなくて関わる必要が無いから話をしないだけよ？初対面でも必要ならハッキリと言うわ」
「私ももつとゆきのんとお話ししたいー！」

由比ヶ浜さんはズズつと顔を雪ノ下さんに寄せながら抱き着く。照れているのか「暑苦しいわ」なんて言いながらもなされるがままにされている。

「仲がいいんだね、二人とも」

「はいっ！私達仲良しですよ!!」

由比ヶ浜さんは、元気よくこちらに笑顔を振りまく。どうやら由比ヶ浜さんは裏表の無い性格らしい。

暫くの間、二人と談笑（というより由比ヶ浜さんのマシンガントークを僕と雪ノ下さんが聞いていただけだが）していると小学生の塊が立ち上がる。

「ん、そろそろ仕事みたいだね……行こうか」

「あ、はい!!」

元気が有り余っている由比ヶ浜さん、それと対称的にゲンナリとしている雪ノ下さんの二人とともに持ち場に着くことになった。

フィールドワークの間、僕達に与えられた仕事は小学生が道から逸れないようにする事だ。彼らの行動は衝動的で、かつ本能的だ。自分の行きたい場所に行く為に全速力で進む彼らの行動を制限する為には、どうしても方向を僕達がある程度絞り込んでやる必要がある。

（本当のフィールドワークならもう少し自由にさせてもいい気がするんだけどね）

高校生や大学生といった義務教育を超えた人間ならまだしも、小中学生にそのようなことをさせる訳にはいかないのだろう。ほぼ等間隔に僕らは配置され、小学生の進行ルートを絞り込む手筈になってい

た。

「おっと、君達ー、そこから先に進んじやダメだよ」

「えー！どうしてー？」

「その先には熊が出るって言われてるから。危ないでしょ？」

「むー……でも、クマも見てみたい！」

子供と触れ合う経験がほとんど無かった僕にはどうも彼らと距離感を図るのが少し難しい。

「突撃ー!!」

「あつ、らー!!」

説得の方法を考えていたら真横を突破されてしまった。その先にクマは居ないが、少し高い段差がある。小学生にとっては危険だという理由で行くのが禁止されている場所だ。

走り抜けたのは四人のうち二人、残り二人は留まっている。

「君達は道に沿って他の先生やお兄さん達と合流してくれるかい？僕は二人を連れ戻すから」

反応を見る前に、僕の身体は柵を飛び越える。小学生がぐり抜けられる柵の存在意味を後で千葉村の運営に問い合せてやる。

小学生は足が早い。急がなければ大怪我をする事になりかねない。

(……そんなこと絶対にさせるもんか)

ふと目の前に、一人の少年が立ち止まっているのが見えた。僕が近付くのを振り返って確認するや否や半泣きで訴えかけてくる。

「翔がー翔が!!」

「……………君は少し下がってろ！」

少年が見ていた先は件の段差がある場所だ。駆け寄って下を見ると垂れ下がる木の枝に捕まるもう一人の少年の姿があった。

「助けてっ……………!!」

涙と鼻水でグシャグシャの顔をこちらに向けて必死にこちらに叫ぶ少年を前に、躊躇う余裕は僕にはなかった。

五、六メートル程の崖を一気に飛び下りる。慌てていたからか、左の足首から嫌な音が聞こえたが今は考えないようにする。そのまま少年を見上げ声をかける。

「手を離して大丈夫だ、君の事は絶対に受け止めるからずっと上だけを見続けるんだ！」

「無理っ……無理だよ！怖いよ!!」

怯えたような声が聞こえてくる。確かに校舎の二階から飛び降りると考えたら足が竦むのも分かる。

「確かに僕だって今飛び下りるのは怖かったさ！でもできる！人は恐怖に勝てる!!そして僕を信じろ！僕はここから飛び降りても平気だった！そんな僕が下で君を受け止める！大丈夫に決まっているだろう!!」

その言葉が言い終わる前に、少年が落ちてきた。どうやら腕が耐えきれなくなったらしい。その少年を、僕自身が緩衝材になる形で頭を打たぬように受け止める。

頭が辛うじて下向きになる前に少年を抱きとめることが出来た――が。

「ぐっ――」

左足は完全に使い物にならなくなってしまったらしい。想像を絶する痛みに顔を顰めるが、声には出さない。

どうにかこうにか痛みが落ち着いた後、少年の顔を見ると気絶してしまっているようだった。無理もないか。

「崖の上にいるかい?!翔君は無事だよ!!もしまだそこに居るのなら道を引き返して先生達にこのことを伝えて、僕は別ルートから戻らって言うっておいて欲しい!!」

聞こえたら返事を、とそう付け足すと元気な返事と走り去る音が微かに聞こえた。これで向こうは安全だろう。

「さて――と、僕も行こうか」

背中に改めて少年を背負い直し、集合場所が続く道へと踏み出す。

僕と、意識を取り戻した彼がフィールドワークの終着点に辿り着いたのは本来の集合時間を30分程遅れてからだだった。

幕間くそれは次の事件への導入く

僕は鍋の下の火の世話をしながらため息をついた。その理由はただ一つ。僕の左足に幾重も巻かれた包帯のせいだ。

あの後、無事に翔君を連れ帰った僕は教師陣からの感謝と謝罪の嵐を受けることになった。あの時の状況を、恐らくは戻った少年が多少脚色を加えて話してしまっただからだろう。

そしてそれと同時に静姉からの治療を受けた。あの人は何も言わず寂しそうに笑って僕の足にこの包帯を巻くと『あまり無理をしすぎるなよ』と言い残してカレー作りの指示を出していた。

班を全体的に男子と女子で別々の役割を振っているのは効率を考えている結果なのかそれとも——いや、やめておこう。厳しくも優しい姉ポジションのあの人がそんな事をしてるなんて思いたくない。

さて、そろそろ隣で死んだ魚のような目をした彼に話を振ってみよう。

「……八幡君はいつの間に僕の隣で暖を取っているのかな？仕事は？」

「俺が行っても怖がられるだけっすからね。俺の目つきは悪いので」

「そんな事は無いんじゃない？葉山君以外の男子スタッフなんて誰であらうと同じ扱いを受けるだろうさ」

女子の多いグループにひっぱりだこの葉山君を見ていると思わず苦笑してしまう。あそこまで他のスタッフとの扱いに差があるといつそ清々しい。

「……………爆発しろ」

「おいおい、女子小学生と男子高校生を見て吐くセリフじゃ無いだろ、それ。何処かのスポコンに見せかけたロリコンラノベじゃないんだから」

「別に俺は小学生が最高だとは思いませんけどね、ただ男女が共にいればそれだけでリア充に見えるじゃないですか……っーか、読むんすね、ライトノベル」

「まあ偏ってはいるけど一応純文学から大衆娯楽まで読もうと思えば

なんでも読めるよ。最近はどうしても娯楽に偏りがちだけど」

意外な共通項を見つけたので少しの間その話で花を咲かせているとふと八幡君の顔が一方方向に固定された。その視線を辿ってみると、また葉山君が別の女子グループに声をかけている（先程の話の後だと犯罪臭がするかもしれないけれども決してそういう訳では無い）。

そのグループの一人に葉山君はよく話しかけているようだけれども、どうやらその子はグループ内でいい扱いを受けていないらしい。「悪手だな……あれは」

ボソリ、とつぶやく彼の言葉が上手く理解できなかつたので二度見すると苦笑しながらどこか自嘲気味に彼は続けた。

「あの小学生は、見る限り何らかの理由で集団から孤立している。まあそういう対象をここではボッチと呼称しますが……ボッチにとつて目立つ事はメリットに決してなり得ない」「というと?」

「目立つ＝調子に乗っていると思われがちだからです。本人にその気持ちが無くとも普段目立たない人間が多少なりとも目立つと気になるのがスクールカースト上位の人間の性です。それが自分達と馬の会う存在であれば受け入れ、合わなければ強く排斥する」

「そもそもスクールカースト、という言葉自体があまり耳馴染みが無いのだけれども、彼女はそのカーストの——」

「下層に属するんでしょうね。今回葉山が話しかけた事で彼女は『イケメンに話しかけられている、地味子の癖に』という目で上位カーストから見られるでしょう。先程のフィールドワークの時にも雪ノ下と俺が孤立しているあの生徒を目撃している。そして今、それをどうにかしようとした葉山の行動で彼女は余計に苦しんでいる」

そう言われて改めて葉山君に話しかけられている彼女に目を向ければ確かに困ったような顔をしている。八幡君の推測を基にして考えるのであれば葉山君が打った手段は最悪のような気もするが……。

「勿論間違いない悪いと一蹴は出来ませんよ。長いスパンで見ると、同じクラスメイトとして見るなら葉山の手段は決して悪くない。長い時間をかけてそいつから葉山は信頼を勝ち取ればいいのだし、葉

山と過ごし続ければ自然とカーストは上がっていく。

ですが二泊三日という極めて短い期間で取れる方策としては最悪だ」

吐き捨てるように、どこがやけくそ気味に八幡君は話をそう締め括った。そして不快そうな顔をしながら「……雪ノ下と話してきます」と言い残し去ってしまった。

と、今度は入れ替わりに件の女子生徒がやってくる。つまらなそうな、諦めたような、でも何処か寂しそうな顔をしている彼女の面差しは昔どこかで会った人と似ていた。

「君は、ええつと……」

「特に用があるわけじゃない。あの場所にいたくなかっただけ」

つつけんどんに言い返してじつとこちらの行動を見ている。火はついたので今は八幡君が持つてきてくれた野菜を煮込んでいる所だ。本当なら代わる代わる高校生組とローテーションしながら自分たちの鍋の様子を見る予定だったのだが、足のせいで動くなと言われてしまっていた。

「班の方はいいの?」

「別に、居てもいなくても同じだし。それに見てたならわかるでしょ

? 私は——」

「イジメられてる?」

「っ!!」

これは僕から見た所感だったがどうやら当たりらしい。だが他人に言われると不快なのだろう。こちらを睨みつけてくる。

「アンタには関係ないでしょ」

「まあその通りだ」

肩を竦めて再び視線を鍋に戻す。短い沈黙が辺りを支配した後ポツリと少女が呟いた。

「話、聞いて欲しいんだけど」

「その前に名乗らないか? 僕は君の名前も知らないんだ」

「留美、鶴見留美」

「そっか、鶴見さん。なんで僕に話そうと思った?」

「翔を助けたって聞いたから。それもそんな怪我をしてまで」

足首を軽くつつかれ苦笑する。

「本当ならもっと上手くやるつもりだったんだけどね……翔君の友達なんだ?」

そう尋ねると、少し顔を赤くしてそっぽを向いた。だがその直ぐ後に顔を強ばらせて俯いてしまう。

「……別に。あんなの、ただの腐れ縁だし」

「そっか……それで、話って?」

僕はあまり口が上手い方じゃない。だから、どうしてもストレートに聞いてしまう。

「……………」

彼女の表情が今度は苦しげに歪む。話したくないのだろう。これは多分彼女にとって辛いことのはずだ。

「……よくあることよ」

長い沈黙の末に、そんな言葉と共に彼女は語り始めた。